メモリーチップ

カトウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メモリーチップ

【Ｎコード】
Ｎ４１０６Ｄ

【作者名】
カトウ

【あらすじ】
「殺されたいほど、俺が好きか」あの男はそう言った。《メルジーネの羊水》サイドストーリー。

これは、容疑者の脳に埋め込まれたメモリーチップから得られた情報である。

保存状態は悪くなく、記憶も鮮明であるが、このメモリーチップ、その他、容疑者の体に人為的に施されたもののほとんどが、オシリス社のコピー製品で、そのデータは改竄の余地があり、法的証拠は一切無い。

また、容疑者は脳をハッキングされており、彼にこのチップを埋め込ませた人間の容姿は不鮮明で、彼が手術を行なった店の名前も、場所も、書き替えられている可能性が大きい。

しかし、それらの事象を考えれば、この事件の真の首謀者が、彼の言う『あの男』である可能性が高いというのが、電警の見解である。

容疑者の脳自体がハッキングされているので、『あの男』と表現されている人物が、男なのか、女なのか、それとも、ネットで作られた疑似人格なのかは、はっきりしていない。

端子の埋め込みをご希望ですか？

いやぁ、あれは、便利な機能です。

ネットと併用すれば、メモリーチップに情報を記録しておくこともできるし、メモリーチップの記憶をネットに流すの場合も、情報を劣化させることなく鮮明に送れます。そのままメモリーチップを読み取るのと同じかそれ以上。
忘れっぽくなった人には最適ですよ。

え、いやいや、お客さん方は、まだまだお若いです。

手術は簡単です。長くても一時間で終わります。少しチクッとするぐらいですね。

え、オシリス社の製品じゃないって？

いやぁ、だから素人は困りますねぇ。確かにこりゃコピーだが、そんなにモノは悪くないですよ。

それに、オシリス社の製品使ったら、足がつきますぜ。困るでしょう。足がついたら？でなきゃ、わざわざ、こんな店来ない。

さて、どうしますか？

そちらのお客さんが、お付けになるんですね。

…はい。分かりました。じゃ、お客さん、こちらの部屋に、あ、お連れさんは待っててくださいね。

え、一緒に？一時も離れたくないんですか？ははは、妬けるなぁ。

簡単な手術ですけど、感染症の事も考えると、できれば同席は避けて頂いた方が。……それにグロいですよ。肉と骨を切り分けて、脳に繋ぐんだから、お客さんも見られたくないでしょう？

はい、分かりました。同席はなしの方向で。

じゃあ、こちらのお客さんはこっちの部屋に。

……アンタ。あの男はやめといた方がいいよ。なんの目的で、アンタに端子をうめこもうとしてるのか分からないけどね。綺麗な顔してるけど、ろくでもない奴だよ。

今なら間に合う。イヤだったら、裏口から逃げれるぜ。どうする？

…逃げないんだね。信じてるのか？あの男を。あんまり関心しないなぁ。

まぁ、せいぜい気を付けるこったね。

猫の女神の声が頭に響く。
黙ってくれないかなあと俺はぼんやりと思った。
いつから、こんな遊びを覚えたのか知らない。
知らない？
いや、知ってる。
あの、男が俺に教えたんだ。
いや、その前から、あまり誉められるような事はしてなかったけど。
こんな、強烈な薬になんて手を出さなかったし、オートマタ《自動人形》を壊して遊んだりすることも無かった。
そりゃ、オートマタは生きてないけど。人間を殺すみたいに、真っ赤に血が吹き出るのにはまいった。
それに、あの男が言ったんだ。俺が好きなら、あいつを『殺せ』ってね。
薬ではっきりしない頭で、フラフラしながら、裸で踊ってる女型オートマタに近づいて、持っていたナイフ（古典的な殺し方だよなぁ）で、メチャクチャに刺した。

店にいた、他の客は、俺がオートマタに近づいた時、何か新しい余興が始まると思って、いやらしい顔をしながら待ってたけど、俺がいざオートマタに刃物を突き立てたとたん、皆叫び声をあげた。

あの男だけは綺麗な顔で、満足そうに笑ってたなぁ。

自分でも、イカレてると思うけど、俺はあの男が喜んでくれるなら、なんだってした。

最初に、あの男に会った時は、あまり、いい印象は無かった。

何故なら、俺の事を、彼は興味も持ってなさそうだし、どちらかと言えば、嫌われていると思っていたからだ。

それが、ふとした拍子に、好意の目、俺の姿を称賛している視線を向けられた時、俺の思考回路は混乱した。
理解できなかったんだ。
なんで、俺に急に優しくするのか。
さっきまでの冷たさってなんだったの？…ってね。

それでも、そうゆう関係に、すぐになったわけじゃなくて、俺にとっては、話や相談にのってくれる良い友達だった。

いつから、そうなったかって、徐々に歩みよったわけじゃなくて、友達の境界線を越えたのは、それはもう、あっとゆう間だった。

つまり、気が付いたら、カマ掘られたってわけだ。

これを強姦というのかどうかはわからない。

そんな、なまやさしいもんじゃなかった。俺、女じゃないし。首絞められたし、殺されるかと思った。

で、12区の裏道りにある、変な店つれていかれて、頭にメモリーチップを埋め込まれた。

俺はそれまで、母親の股から生まれたまんま。生身のままだったから、恐怖でいっぱいだった。恐いじゃないか。頭の中に異物入れるなんて。

あの男は、行為の時とは違って、優しい口調で、

「暫らく会えないだろうから、お前の記憶を共有したいんだ」

とか、言いながら、顔同様、綺麗な手で俺の頭を撫でた。

その手が、表情が、あまりにも優しくて、俺は一つの返事でそれを承諾した。

だが、この男は俺にメモリーチップを入れときながら、自分は生身のままだった。

俺のメモリーチップを読み取る時も、端末からしか見ていなかったし。

それに、あの男は、記憶を共有したいと言ったが、それは嘘だ。俺を辱めて卑しめたいだけだった。まぁ、薄々は感付いてたけど。

会った時、端末からメモリーチップの情報読み取って、普段、俺が他人に見せられないような、光景。それを一緒に見て楽しむわけ。ションベンの放物線から、もう、なにもかも。

俺は泣いた。

恥ずかしいというより、自分がみっともなくて、みすぼらしくって。

それで、やめてくれるような人間じゃない。

あの男は、嘲笑いながら俺の股間に手をのばした。

「女々しいな。いっそ女になっちゃえば？」

そう言いながら、モノを強く握ってきた。

俺はひぃひぃ言いながら泣きわめいて、自分が悪いわけじゃないのに、男に謝った。

それで、メモリーチップの次は、端子の埋め込みだ。

理由は、会うたびにメモリーチップを読み取るのが面倒になったからだと言う。

ネットに繋げば、それなりに情報は送れるが、やはり劣化してしまうし、不鮮明になる。

端子を埋め込んで、脳ミソとメモリーチップに繋げば、チップを直接、読み取るように、離れた端末からでも、鮮明に情報を見ることができる。

男は、これからは、ネットに接続して、俺の記憶を自分の端末に送れと命じてきた。

それで、また、１２区の裏道り、胡散臭い店に連れてこられたってわけだ。

店主は黒い毛におおわれた猫の半獣で、まるで、エジプト神話の猫の女神のようだと俺は思った。そして、本当に胡散臭い店だと思った。

俺が手術用の白衣を着るのを、猫の女神は黙って見てた。

薬で頭がボーッとしていたが、猫の女神がナニを見ているのかはわかった。

「ひどいなぁ」

猫の女神がそう言ったのは、俺の体中に付けられた傷跡の事だった。

首から下、服に隠れて見ない部分の殆どに傷跡はあった。それは全部あの男に付けられた傷だった。

「人様の趣味にどうこう言える立場じゃないが、アンタ、相当な物好きだねぇ」

俺は笑った。自分でもイカレてると思う。ケツ差し出すだけじゃなくて、傷つけられるのが嬉しいのだ。

もっとひどい目にあいたかったし、もっと軽蔑して欲しかった。
世界を睥睨するような瞳、あの不遜な眼差しが、愛しくてしょうがないのだ。
「こっちは化膿してるし」
猫の女神が大腿についた傷を長い爪でつつくので、俺は睨んだ。
あの男以外に触られたくはなかったからだ。
猫の女神は、ため息をついた。
「可哀相だから、サービスで傷も消しとくよ。これからは病院へ行くんだな。」
「病院はイヤだ。色々、詮索されるし」
「じゃあ、この店においで。サービスするから」
俺は黙って頷いた。
「あとさ、端子埋め込むと、メンテも大変だし、脳ミソをハッキングされることもあるから気を付けろよ。
…って、何、言っても無駄か」

俺は手術を終え、傷を消した後、１２区に借りた部屋に、あの男と一緒に戻った。
親の用意してくれた家は別にあるけど、男とつるむようになってから、そこに入り浸っていた。
１２区はアイシスが搭載されていない場所も多く、治安も悪いが、あの男と遊ぶにはもってこいの、いかがわしい店や、胡散臭い店が沢山あったからだ。
「きれいに消してもらったんだな」
俺のバスローブをはだけて、素肌を眺めながら、あの男は言った。
俺は顔が赤くなるのが分かった。薬は随分前に切れていて、麻痺していた感情や感覚、特に羞恥とゆうものが、鋭くなっていた。
あの男は、シャワールームから出てきたばかりで、腰にタオルを巻いただけだった。
湯気に囲まれた肢体は均整が取れていて、彫刻のように見事だったし、濡れた髪に囲まれた顔は、端正で、甘く、だからといっていかがわしくもなく、知的だった。俺は男を見るたびに、恥ずかしくてどうしようもなくなる。

それまで、自分の容姿に、コンプレックスを抱く事は無かったが、こうも、完璧なものを見せ付けられると、自分が卑しくてしかたがなくなるのだ。

男にいつ押し倒されるか、考えると、もう羞恥はピークに達しそうだったが、男がバスローブを羽織ってしまったので、俺はがっかりした。

そんな、俺の様子を察したのか、男は笑った。

「今日は、少し変わった事をしよう」

サイドボードの引き出しから、妙な目元を覆うヘッドギアのようなものと、コードを取り出すと、コードを、今日、俺のうなじに埋め込んだ端子に差し込んだ。

俺は馬鹿みたいな顔をしていたんだと思う。

何が始まるんだろうと、少しだけわくわくしていたのだから、救いようがない。

男がヘッドギアを装着し、俺を繋いだコードをそれに差し込んだ瞬間、目の前が真っ暗になった。

「そう、震えるなよ」

俺はいきなり、何も見えなくなった事が、恐かった。

男の熱を持った指が、俺の首筋に触れた。視覚を奪われると、いつもと違った感触がして、また震えた。

徐々に視界が明るくなってきて、見えてきたのは、あの男じゃなくて、俺だった。

本当、俺は馬鹿みたいな顔して、口をパクパクさせていた。

「……なんで？」

俺の間抜けな質問に、男は声を上げて笑った。

「コレだよ。コレ」

埋め込んだ端子にさしたコードを、俺の顔の前でぶらぶら振りながら、男は言った。

「今、お前が見てるのは、俺がつけたヘッドギアからの視覚だよ」

その声が艶を含むものだったから、俺はびくびくした。

男がこういう声を出す時は、決まってひどい事をされるからだ。

俺は目蓋をギュッと閉じたが、視界はそのままだった。当たり前だ。脳に直接、視覚がつながってるんだから。

「おいおい、顔そらすなよ」

顎をつかまれて、顔を正面に向けさせられる。

「お楽しみはこれからなんだから」

男は、低く艶のある声でそう言い、唇を唇で塞いで、舌をねじりこませてきた。

気が付くと、俺は、あの、猫の女神の店にいた。

「皮膚はりかえて、腕と指は繋いでおいたから」

俺は重く靄がかかったような頭で、ボーッと考えながら、尋ねた。

「あの男は？」

「先に帰ったよ。呑気だねぇ。あんな事されたのに」

あんな事されたのに。

あんなに、ひどく体を傷つけられたのは初めてだった。

最初は、異常でも、普通の行為だったと思う。

男の視覚で、自分の体におきてる異常を見せ付けられて、普段、自分では見れないような角度から、行為を見せ付けられた。

恥ずかしくて死にそうだったけど、泣きながら悦んでいたのも事実だ。それに、実際に死にそうになったのはそれからだ。

散々、弄ばれて、クタクタになったところで、あの男は信じられない事をしだした。

刃物をちらつかせながら、言ったのだ。

「お前は今から白ウサギだ」

白ウサギ。

ぴょんぴょんと跳ねるあのウサギの事かな。と思った俺は甘かった。

傷つけられることには慣れていてしまっていたし、散々、なぶられて、頭がはっきりしなかったせいもあると思う。白ウサギは白ウサギでも、男は重要な言葉を言わなかったのだから。

そして、あの男は、とてもひどい事をしはじめた。

背中の皮を刃物で剥ぎはじめたのだ。痛みに叫び声を上げると、男は楽しそうに笑った。

「ウサギは鳴かないんだよ」

そう言われても、無理だった。しかも、目を閉じても、脳に流れ

込んでくる視覚情報のせいで、俺は自分の皮膚を剥がされる光景を見せ付けられた。

真っ白なシーツにアバンギャルドな染みを作りながら、やめて、とか、ごめんなさい、とか言ったって無駄な言葉を口走った。痛みと恐怖で気が狂いそうだった。

そして、背中の皮を（時には肉まで）剥いだ後、右手の指を一本、一本、落とされて、最後に腕を落とされた。

信じられないのは、そんな恐ろしい事をされながら、俺は射精したのだ。

「アンタね、このままじゃ殺されるよ」

猫の女神が背中に薬を塗りながら言った。

俺は哀願したのだ。あの、ろくでもない男に。

殺して欲しいと哀願したのだ。

男は笑いながら言った。

「殺されたいほど、俺が好きか」

殺されたいぐらい好きなのかどうかよりも、もう、痛くて苦しくて、どうにかなってしまいそうで、早く楽にして欲しかった。

「アンタは根っからの変態だね。オレは痛いのはイヤだなぁ」

猫の女神が尻尾を神経質にパタパタさせた。

少なくとも俺は、あの男に出会うまでは、マトモだった。

男同士で絡み合うなんて、信じられない事だったし、痛い事をわざわざするなんて、信じられなかった。

人は何かを媒体にして変わるものだと、何かの本か映画で見た事があるが、あの男を媒体に俺は変わっていったんだと思う。

でも、あの男が、以前から、根っからのサディストだったのかどうかは、俺には分からなかった。

よく考えれば、俺はあの男の事を何も知らないのだ。名前も偽名かもしれない。

俺は彼に連絡ができなかった。会うのは、男が尋ねてくるときのみ。会う回数も決まってなくて、一週間続けてだったり、一ヵ月に数回だけのときもあった。

薬を塗ってもらったあと、会計を頼むと、値段は思ったよりもずっと安かった。

猫の女神はニィーッと、口が裂けるぐらい口角を上げ笑いながら言った。

「アンタ、暫らく、この店に通うことになるだろうから、まけといてあげるよ」

猫の女神のいう事は、的中した。

俺は男に会うたびに、今回のように体を傷つけられるようになったからだ。

今までの傷なんて、死ぬ気のない、形だけのリストカットのようなものだったのだ。

あの男と会うのは久しぶりだった。

俺は2ヵ月前、一週間以上ぶっ続けで、ひどい事をされたのに、男の顔を見た瞬間、嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。

今まで、時間があく事はあったが、ここまでほったらかしにされたのは初めてで、俺は男に捨てられたのかと思っていたのだ。

抵抗したのがよくなかったのか、貧血で倒れたのがよくなかったのか、あれこれ、考えていた。

最初は焦りや憎しみに近い感情、最後にきたのは、なんと、悲しみだった。

もう、ここまでくると、救い様が無い。立派な依存だ。

「傷の調子は？」

自分がつけたものなのに、男は心から心配するように尋ねた。俺の頬に手までそえて。

あの猫の女神は、モグリのわりにはいい腕で、切り落とされた部位も剥がされた皮膚も、綺麗に復元されていた。

「今まで何をやってたの？」

俺が尋ねると、男の表情が急に厳しいものになり、面白くなさそうに、つぶやいた。

「仕事」

俺は、男を怒らせるような事を聞いてしまったのかと思って、びくびくしていたが、男は怒らずに、いつになく、真剣に俺を見つめてきた。

「それより、お前に頼みたい事があるんだ」

あの男に頼み事をされたのは、今回が初めてでなかったが、あんな真剣に見つめられたのは初めてだった。

俺は嬉しい反面、何故か妙なひっかかり覚えた。

俺の頭のなかの、あの男は、絶対にあらがえない存在だったからだ。

そんな男に、お願いされたのだ。

いつも、哀願したり、膝をついて許しを乞うのは、俺の役目だったのに。

あの男の頼み事は簡単なものだった。

男の指定したネットに決められた時間、俺が直接（あの端子で繋いで）アクセスすればいいだけだった。

俺が了承すると、男は微笑んだ。こんな笑顔を見るのも初めてだったが、それは、すぐに消えて、浮かび上がったのは、いつもの肉食獣の微笑みだった。

やはり、こうでなくてはいけないと、内心、納得しながら、沸き上がった恐怖と期待で、俺は、はち切れそうになった。

俺の感情はとてもシンプルで、低コストだ。

自分の欲しいものを与えてくれる男が好きなだけだった。

あの男に散々、弄ばれて、殺されるかと思うほど痛めつけられて、いつも通り、気が付いたら、猫の女神の店にいた。

「今回は今までで一番ひどかった」

猫の女神がうんざりしたように、俺に言った。

俺は手足を全部切られて、芋虫のような状態で、ここに運びこまれた。

軍用の止血剤を吹きかけながらの作業だったが、出血が多すぎて、店に運び込まれた時には、もしかしたら、本当に死ぬかもしれないと猫の女神は覚悟を決めたそうだ。

「いつか殺されるね」

猫の女神は呆れたように、増血剤を俺に手渡しながら言った。

「あの男はなんか言ってた？」

俺は猫の女神の話なんて聞いちゃいなかった。

「いつか死ぬから、程々にしといたほうがいいってオレが言ったら、笑ってたよ。本当、ろくでもない男だ」

俺はそれを聞いて嬉しかった。それでニヤニヤしてると、猫の女神はため息をついた。

「色んな客が、この店を訪れたけど、君らが一番イカレてる」

そんな事を言われても、俺は平気だった。

「そんなに、あの男が好きなんだ」

分かりきってる事を、今更、聞いてくる猫の女神をうっとおしいなぁと、思いながら、俺は答えた。

「そう、好きなんだ」

猫の女神は馬鹿みたいに大声をあげて笑いだした。

「アンタも自分勝手だね」

あの男に頼まれた通りに、指定されたネットに接続してからの事はよく覚えていない。

そのネットは、なんか、妙な感覚だった。気持ち良かったのかもしれないし、最悪な気分だったのかもしれない。

自己を保ちつつ、自分が自分でなくなるような、そんな気もした。

そして、気が付いたら、俺は電警に捕まっていて、アイシスのハッキング容疑で取り調べを受けていた。

俺のメモリーチップを調べると、電警の刑事の一人は嘔吐した。普通の神経だったら、当たり前だよなぁ。

俺はひどく同情された。

「あんな、ひどい目にあわされたうえに、君は騙されたんだ」

と、中年の男は言ったが、俺が、

「誰に？」

と、尋ねると、呆れたように、ため息をついた。

「君のメモリーチップにあった、『あの男』にだ。君を玩具にした

ばかりか、君を使ってアイシスをハッキングさせた。君は利用されたんだ」

それを聞いて、俺は笑わずにはいられなかった。

騙された？利用された？願ったりじゃないか。

俺はいつだって、あの男に利用されたかったんだから。

あの男の自分勝手で薄情な所に恋をしたのだから。

誠意など初めから求めてはいなかった。

俺は、あの男の事を何も知らなかった。名前だって偽名に違いない。

刑事の話では、俺は脳ミソをハッキングされていて、記憶を書きかえられている可能性も高いらしい。『あの男』が、男なのか、女なのか、またはネットで作られた疑似人格なのかも分からないそうだ。

最高のエンディングだ。

結局、俺は証拠不十分で釈放された。

まぁ、脳をハッキングされて事件を起こした場合、今の法律では

大した罪は問えなかったし、俺の父親の立場も役にたったみたいだ。

俺は初めて、父親の法務省での立場と権力を思い知らされた。正直、ここまで、力を持った官僚だったとは思わなかった。

釈放される前に、白い隔離部屋に閉じ込められていた、キセニア辺りの混血の男を、マジックミラー越しに見せられた。

「この男に見覚えがあるか？」

中年の男にそう尋ねられたが、そんな男は知らなかったので、首を振った。

何があったのか、何をされたのかは知らないが、混血の男は目を開けたまま、放心状態で、少し可哀相だった。その事を中年の男に伝えると、彼は鼻で笑った。

「君が『あの男』の言う通りにしたから、彼は大変な目に巻き込まれたんだ」

「そう、それなら仕方がない」

俺の言葉に、中年男は目玉をひんむいた。俺を反省させようとでもしたのだろうか？馬鹿だなぁ。

俺は赤の他人の為に自分の楽しみを犠牲にしたくはなかった。

「自分の事だけ考えて生きていればいいと思わない？だって、それだけで、精一杯なんだからさ」

俺の言葉に、中年男が何か言い返してくれるかと期待したけど、彼は口を閉ざした。

釈放されて、身元を引き取りにきてくれたのは父親だった。

父親は、渋い顔をしていた。いつもみたいに『大学へ行け』とか『家に帰ってこい』とも言わなかった。

この事件がショックだったみたいで、一言も喋らなかったが、父親の姿を見ると、なんだか、とても懐かしいものを見たような気がして嬉しかった。

あの男の本意も、俺の事をどう思っていたのかも、結局は分から

なかった。

明確なのは、彼が俺を利用してアイシスをハッキングした事。それだけだった。

しかし、それらは俺にとってはどうでもいいことなのだ。

俺は、あの神のように世界を睥睨し、尊大で、不遜で、自己陶酔の極みに立つ、あの男が好きだったのだから。

それだけは俺のもので、あとは必要のないものだから。

例えるなら、俺とあの男は同じ木に生えた、葉っぱのようなものだったのだ。

一方が風で吹き飛び地面に落ちて、一方はまだ木に残っている。

それが、どちらなのかは分からない。

だって、どちらも大した差はないのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4106d/

メモリーチップ

2010年10月11日20時06分発行